

20世紀前半期インドネシアにおける外来系住民・ 現地人妻妾・民族主義者

—海域社会の統合と分化のダイナミズム—

弘末雅士（立教大学文学研究科・教授）

1. はじめに

東西海洋交通路の要衝に位置した東南アジア島嶼部には、古くから周辺世界から来航者があった。彼らのなかには風待ちや商業活動のために長期滞在する者があり、現地人女性と家族を形成することも珍しくなかった。前近代の東南アジア島嶼部には、現地の有力者が来訪者に対して現地人女性との同棲（疑似結婚）を斡旋する慣行が存在した[Andaya (1998); Reid (1988): 154-156]。こうした現地人女性と外来者は、必ずしも正式結婚したわけではなかったが、現地側は彼女たちを実質的な妻と見なし、ニヤイ（nyai: 「ねえさん」）という尊称で呼んだ。16世紀の終わりに来航し、ジャワに拠点を構えて植民地支配を展開したオランダ人も、その慣行を受け入れた。1869年にスエズ運河が開通するまで、ヨーロッパ人が家族同伴で東インド（インドネシア）に来ることはほとんどなかった。19世紀末の東インドでは、ヨーロッパ人の約半数がこうしたニヤイを有した[Marle (1951-52): 486]。華人やアラブ人の場合も、同様であった。

こうした現地人妻妾やその子孫達は、現地社会と外来者コミュニティを仲介する重要な役割を担った。ニヤイは家事に従事するだけでなく、外来者に現地の言語や慣習を教える役割を担った。またヨーロッパ人男性と同棲した原住民女性との間に生まれた子供は、父親が認知すればヨーロッパ人の法的地位を得た。認知された娘は、女性の数が少なかったヨーロッパ人コミュニティにおいて、男性の貴重な結婚相手となった。1880年に約6万人を抱えたオランダ領東インドのヨーロッパ人の過半数は、ユーラシアン（欧亜混血者）であった。

こうしたなかで、19世紀後半にヨーロッパで展開し始めた性モラル向上運動は、正式結婚を伴わない男女の同棲や公営売春宿の運営に、厳しい批判を投げかけた。スイスやイギリスで始まったこの運動は、やがてオランダにも伝播した[Abalahin (2003): 221-22]。ヨーロッパ本国での運動の影響力を無視できなくなったオランダ植民地政庁は、20世紀始めに植民地官僚がニヤイを持つことの自粛を通達した[Java-Bode (1904)]。さらに1913年には、結婚していない植民地軍ヨーロッパ人兵士と現地人女性との同棲を禁止し[Ext. 6/5/1913/74; Ming (1983)]、東インドにおける公営売春宿も廃止した[Prostitutie (1919): 512-13]。

他方1910年代から本格的に展開し始めたインドネシア民族主義運動も、男女関係のあり方に少なからぬ関心を払った。民族主義者たちは、性モラル向上運動を逆手に取る形で、ヨーロッパ人や華人がニヤイを持つことを厳しく非難した。また異なる法的範疇者間の「混淆婚」¹は、しばしば大きな話題となった。とりわけインドネシア民族主義者たちが話題にしたのは、現地人男性がヨーロッパ人女性と結婚した場合であった。ヨーロッパ人男性が現地人女性をニヤイとするこ



写真1 19世紀終わり頃の欧亜混血者と彼のニヤイ（左）および友人のニヤイ（右）

Nieuwenhuys1982より

とへの批判的関心は高かったが、彼らが彼女たちと結婚することは、あまり話題にならなかった。

国民国家の形成過程において、当該国民と外国人との男女関係には、高い関心が払われた[ストーラー (2010); Abalahin (2003): 400, 471-75; Locher-Scholten (2000)]。特に当該集団の女性と他集団の男性との結婚は、注目をあびることが多かった。例えばオランダは、ヨーロッパ人女性と東インドの「原住民」との結婚に複雑な感情を抱いた。なぜインドネシアでは、現地人男性の混血婚に高い関心が払われ、現地人女性の場合はあまり問題にされなかったのであろうか。本稿は、東インドにおけるニヤイや欧亜混血者の存在が、ヨーロッパ人の人種主義やインドネシア民族主義の男女関係観に及ぼす影響を一面的にしたことを検討し、彼らの社会統合における役割を再考したい。

2. オランダ領東インドにおけるヨーロッパ人の婚姻とニヤイ

バタヴィアに拠点を構えたオランダ東インド会社の時代、ヨーロッパ人の結婚相手は、クリスチャンの女性と定められた。ただしこうした女性の数が限られたため、彼らは非クリスチャンの現地人女性や女奴隷と同棲することが多かった。同棲者との間の子供が父親に認知されると、クリスチャンに改宗し、ヨーロッパ人コミュニティの構成員となった。東インド会社は1799年に解散し、オランダ植民地政庁が東インドの統治を引き継いだ。ただし、19世紀の半ばまで、ヨーロッパ人男性の結婚できる相手がクリスチャンに限られるとする法律は、変わらなかった[Abeyasekere (1983): 23]。

1848年の法令により、ヨーロッパ人と現地人との婚姻は、宗教と関係なく認められた。しかし、その手続きのために経費がかかり、またヨーロッパ人女性が現地人男性と結婚した場合、その法的身分（その子供もふくめ）は明確に定められていなかった。オランダは1854年の東インド統治法において、従来の宗教を基盤とする法的区分に代えて、人種的観点から住民をヨーロッパ人、外来東洋人（華人やアラブ人など）、原住民に区分し、刑法や商法、民法において差異を設けた(吉田2002)。その結果多くのヨーロッパ人男性は、現地人女性と結婚するよりも、ニヤイと同棲することを選んだ。1880年代90年代の東インドのヨーロッパ人の混血婚は、結婚全体数の13%前後である一方で[Marle (1951-52): 322]、上述したように約半数のヨーロッパ人男性がニヤイを有していた。

オランダは婚姻規定の改正にかかり、1896年の混血婚規定より、妻の法的身分が夫に準じることが明確に定められた[Nederburgh (1899): 1-5]。オランダはニヤイとの同棲慣行に歯止めをかけようとしたが、状況は必ずしも思惑通りに進行しなかった。家族同伴でやって来るヨーロッパ人が増加する一方で、交通手段の発達によりヨーロッパ本国から来航者が増え、男性単身赴任者も少なからずいた。1860年に43,876人とされる東インドのヨーロッパ人人口は、1900年に91,142人、1920年に168,114人、1930年には241,142人に増加した[Volkstelling 1930 (1933): 18, 31-32]。オランダは、政庁官吏や植民地軍のヨーロッパ人兵士のニヤイとの同棲を禁じたが、私企業にまで干渉しなかった。このため、私企業関係のヨーロッパ人男性は、相変わらずニヤイを持つ者が少なくなかった。

またそれまで現地人の注目を浴びなかったニヤイが、19世紀終わり以降、盛んに小説や演劇で取り上げられ始めた。先の東インド統治法により、制限つきであるが出版の自由が認められた。ヨーロッパ人や華人の編者による新聞が、バタヴィアやスマラン、スラバヤなどの都市で発行され始めた[Adam (1995): 16-107]。また1890年代になると、欧亜混血者の役者と華人の経営者によるコメディ・スタンブルと呼ばれた新たな演劇が登場し、アラビアンナイトや白雪姫などの東西の話を題材にしたミュージカルを各都市で上演した[Cohen (2006): 1-4]。こうした出版物や演劇で人気を博したのが、ニヤイをテーマにした話であった。下層出身のニヤイが裕福なヨーロッパ人や華人と同棲する話は、多様な階層と民族集団を有する植民地社会全体をイメージでき、かつ正式結婚していない男女関係を、流動性の高くなった社会状況を絡めながら楽しめるテーマであった[Watson (1971): 420-23, 427-30]。

当時人気を博したニヤイをめぐる作品の多くは、欧亜混血者や華人によるものであった。それらの作品では、原住民社会とヨーロッパ人社会の差異がしばしば強調され、ニヤイは二つのコミュニティを揺れ動く存在として描かれた[Tsuchiya (1991); 松尾 (1997): 182-188]。東インドの人々が広くニヤイのイメージを持つきっかけとなった。²

3. インドネシア民族主義運動の展開と男女関係

インドネシア民族主義運動は、欧亜混血者の形成した東インド社会におけるネットワークを受け継ぐ形で展開した。19世紀終わりになるとオランダ本国よりやってくるヨーロッパ人の増加により、東インド生まれのヨーロッパ系住民は、それまで就業していた政庁や企業での職種を彼らに追われ始めた。後者は前者からインドー(Indo)と蔑称で呼ばれ、欧亜混血者の貧窮化が深刻化した。これに対し東インド生まれのヨーロッパ系住民は、出版物をとおして相互扶助を訴え、ヨーロッパ本国から来る一時滞在者が、東インドの富を搾取して帰ることを非難した[Bosma and Raben (2008): 301-302]。

1880年代より、ヨーロッパ系住民の間で相互扶助団体が誕生し始めた。1898年にバタヴィアに設立された東インド同盟(De Indische Bond)は、東インドのヨーロッパ人住民の物心両面の援助をうたい、1900年に会員4500名近くを数えた。会員のほとんどは、ヨーロッパ人の法的地位を持つ欧亜混血者であった。同盟は機関誌を発行し、同盟の店を設立し、ヨーロッパ人小農業を促進し、教育を促進させるなど、新しい生活手段の開発を目指した[ブルンベルヘル (1939): 66]。

これに対し、下層のヨーロッパ系住民の不当な窮状を訴えるために、東インド生まれのヨーロッパ人およびヨーロッパ人住民のうち永居者の利益の促進を目的としたインスリンデ(Insulinde)が、プランテーション企業の参入で新来のヨーロッパ人の増えたバンドウンで、1907年に創設された。インスリンデは、植民地体制下で教育を受けたジャワ人有識者とも交流し、1911年には結社の目的を、オランダ領東インドの繁栄と福祉のために物心両面の利益を促進し、この目的の妨げとなっているすべての不当な状態や法令を廃棄することに努めることに改定した[ブルンベルヘル (1939): 67-68]。また少なからぬヨーロッパ系住民が就業していた公営事業の職員の間から、労働組合も組織され始めた。1908年に中部ジャワ北岸のスマランに鉄道組合が生まれ、原住民メンバーも参加が認められた。ヨーロッパ系住民の周辺に、原住民エリートたちが集い始めた[Bosma and Raben (2008): 307-308]。

そして1912年には、東インド同盟とインスリンデを統合するために、欧亜混血者のダウウェス・デッケル(Douwes Dekker)とジャワ人のチプト・マンゲクスモ(Tjipto Mangunkusumo)とスワルディ・スルヤニングラット(Suardi Surjaningrat)が中心となり、東インドを祖国とみなす「東インド人Indiërs」による国家作りを目指す東インド党(De Indische Partij)を、バンドウンで創設した。この「東インド人」には、原住民であろうが、ヨーロッパ人であろうが、外来東洋人であろうが、東インドを祖国と考える人ならば、誰でもなれるとされた。東インド党は、7000名ほどのメンバーを獲得したが、そのなかに原住民も1500人含まれると唱えた[Veur (2006): 209]。

こうした原住民のうちからも、社会変革運動が生起した。植民地支配の進展とともに、東インド社会に学校教育を受けた新たな階層が誕生した。1908年原住民医師養成学校の学生達を中心となり、原住民の調和ある発展をかかげ西欧教育の普及とジャワ文化の探求を目指して、ブディ・ウトモ(Budi Utomo: 叡知)が創設された。また1911年末、辛亥革命の成功に高揚する華人系住民に対抗して、原住民ムスリムの相互扶助と物心両面の発展を掲げて中部ジャワに設立されたイスラーム同盟(Sarekat Islam)は、大衆運動の起点となった。イスラーム同盟は、華人への反発やムラピ山の噴火、疾病の流行や米価の高騰などの社会不安を背景に、またたく間にジャワ島各地に広がった。同盟は、1913年半ばまでに会員30万人を獲得し、ジャワ以外の島々でも各地に支部が設けられた[深見(1996): 52]。会員

のなかには、やがてイスラーム同盟の力がオランダ政庁を凌ぐと期待する者さえ現れた。こうした状況下、イスラーム同盟と接近をはかった東インド党は、オランダより植民地秩序を乱すものとみなされ、1913年に解散させられた。一方イスラーム同盟の発展とともに、原住民の発行する新聞の数が、欧亜混血者や華人のものを凌駕し、原住民意識が東インド住民の間で、広く共有され始めた[Adam (1995): 171-177; アンダーソン (1997): 196-200]。

イスラーム同盟の活動において、コーランの教えに反し非ムスリムと同棲するニヤイは、人々の大きな話題となった。1913年のバタヴィアやバンドゥンの同盟支部の会合において、現地人女性をニヤイとする華人やヨーロッパ人は非難の対象となり、また家族の一員をニヤイとして華人やヨーロッパ人に提供した者は、同盟に加入できないとされた[Verbaal 9/8/1913/B13; Onderzoek (1914): 25-27]。また各地で華人のもとにいたニヤイの奪還活動も起こった。³

イスラーム同盟の運動は、1910年代半ばより社会主義者をも加え、勢力を拡大し始めた。1914年スマランに、オランダ人や欧亜混血者の社会主義者が東インド社会民主主義協会(Indische Sociaal Democratische Vereeniging)を設立し、鉄道の労働組合運動の指導に乗り出した。協会は運動の拡大をはかるために、原住民の協会員をイスラーム同盟にも加盟させた。その結果、多彩な同盟員を抱えたイスラーム同盟の1916年の大会は、その名称をインドの民族主義運動を意識して、「国民会議」とした。また翌年のロシア革命によるソヴィエト連邦の誕生は、社会主義者を活性化させた。イスラーム同盟も増大する社会主義者に配慮して、「罪深い資本主義」への対決を打ち出した[Blumberger (1931): 65-68]。

高揚する社会主義者たちは1917年の終わりに、植民地軍の兵士や水夫たちにソヴィエト樹立を働きかけ、紅衛兵運動を展開した(McVey 1965: 29-33)。これに対し、オランダは厳しく対応した。東インド社会民主主義協会のリーダーであったオランダ人や欧亜混血者たちは、多くが国外追放となった。その結果運動の主導権は、原住民の社会主義者に移った。1920年、彼らは現地語よりなる名称を掲げた東インド共産主義者同盟(Perserikatan Komunis di Hindia)を結成した。一方イスラーム同盟では、イスラーム改革派と社会主義者の間に主導権争いが生じ、1923年に二重党籍が禁じられた。社会主義者はイスラーム同盟を去り、翌24年に東インド共産主義者同盟をインドネシア共産党(Partai Komunis Indonesia)に改称し、植民地支配からの解放を前面に掲げた(McVey (1965): 166-93)。こうしたラディカリズムは、当初民族主義運動に関与した欧亜混血者たちを運動から後退させた。

時代は、人々の期待をインドネシア共産党に向けさせた。共産党は、1926年末から27年にかけて植民地体制の打倒を掲げ、蜂起を決行した。だが蜂起は失敗し、インドネシア共産党は解散させられた。しかし、その後もインドネシア国民党(Partai Nasional Indonesia:1928~31年)やインドネシア党(Partai Indonesia:1931~36年)の活動をとおして、原住民色の強い民族主義運動が展開した[永積 (1980): 237-261]。これに対しオランダは厳しく運動を弾圧した。その結果1930年代中葉以降は、オランダとの協調を掲げる政党しか活動が認められなくなった。こうした状況下欧亜混血者のなかには、インドネシア人とともに東インドの自治を求める運動を展開する者が現れた。

民族主義運動の発展とともに、男女関係にも民族的差異が強く意識され始めたことは、上述したとおりである。ただし、興味深いことにインドネシアでは1910年代から1920年代の後半まで、ヨーロッパ人と現地人女性(華人系住民も含む)との婚姻数が増加した。1905年には、東インドで結婚したヨーロッパ人男性の約15%の相手が現地人女性であったが、1917年にそれが約20%となり、1922年に23.88%、1924年に29.71%へと増加し、27年に28.89%、1930年は22.76%を記録した[Volkstelling 1930 (1933): 66]⁴。とりわけすでに欧亜混血者のコミュニティが存在する場所で、その割合が高かったが、現地人女性と結婚したヨーロッパ人男性に、新来者も4割近く含まれた[Marle (1951-52): 326]。植民地軍に勤務するヨーロッパ人兵士が、その多くを占めたものと推定されている。

これらの婚姻は、当初同棲の状態から、その後子供ができると正式結婚に移行する場合が多かった。性モラル向上運動や民族主義運動の影響が無視できないものであったことを示しているが、「混淆婚」のきっかけは、従来と同様の形態であった。男女の出会いの場は、ヨーロッパ人や華人さらに日本人（1899年から東インドにおけるヨーロッパ人の法的地位を獲得）の経営するホテルやカフェ、食堂などであった[Nieuwenhuys (2005): 15; Abalahin (2003): 268-271]。オランダ植民地政庁がニヤイとの同棲を自粛するなかで、ヨーロッパ人に現地人女性を斡旋する役割は、それまで主導した村長や郡長から、欧亜混血者や華人たちに代わっていた。

外来者が現地人女性をニヤイにすることへの批判は民族主義者やムスリムの間で盛んであったが、こうしたヨーロッパ人男性と現地人女性の婚姻は、彼らの新聞でほとんど取り上げられなかった。例外的に現地人女性が富裕な階層に属していた場合、ヨーロッパ人男性の結婚の意図が、妻の土地を領有することにあると話題にされることがあった[*Oetoesan Hindia* (1922)]が、多くが下層の出身であった現地人女性が正式結婚し、夫の法的地位に準ずることは、民族主義者にとって許容できることであったのであろう。ブディ・ウトモの関係誌『ダルモ・コンド』は、ヨーロッパ人や華人、アラブ人がニヤイを持つのではなく、もっとインドネシア人と結婚するべきであるとさえ説いている[Darmo Kondo (1932)]。

これに比し、現地人男性とヨーロッパ人女性との結婚には、様々な異論が展開された。1919年ブディ・ウトモの結成に尽力した民族主義運動のリーダーのジャワ人ラジマン(Radjiman)が、ヨーロッパ人の女性と結婚することが決まると、イスラーム同盟の実質的な機関紙であった『ウトゥサン・ヒンディア』と『ダルモ・コンド』は、その婚約に疑義をはさんだ。両紙は、それが愛情にもとづく結婚なのだろうかと報じ、前紙はさらに、ジャワ人が本当に外国人を愛することができるのか疑問を呈した[Darmo-Kondo (1919); *Oetoesan Hindia* (1919)]。またあるインドネシア人女性の投稿者は、「罪深い資本主義」が現地人女性をヨーロッパ人のニヤイにしてしまい、一方教養ある現地人男性はしばしばヨーロッパ人女性と結婚し、オランダ国歌を歌う羽目になっていると非難した[*Perempoean Bergerak* (1919)]。



写真2 インドネシア民族主義運動のリーダーの一人ストモとオランダ人の彼の妻
Dukut Imam Widodo 2010より

現地人男性とヨーロッパ人女性の結婚への反論とニヤイ批判は、しばしば絡み合って展開した。社会主義者の勢力の増大とともに、外来系住民がニヤイを有することと、現地人男性がヨーロッパ人女性と結婚することは、資本主義がもたらす否定されるべき行為とされた。インドネシア人男性とヨーロッパ人女性の結婚への批判は、その後も女性運動家を中心に展開され、家族が帝国主義に侵される[*Penerangan Islam* (1928)]、そうした結婚はインドネシア人女性の卑下につながる[*Soeara Indonesia* (1931a), *Oetoesan Sumatra* (1931)]、と非難された。民族主義者たちは、混淆婚をするヨーロッパ人女性の目的が、夫の富に与かることにあるとみなした[*Soeara Indonesia* (1931b)]。こうした混淆婚と、ニヤイを有したヨーロッパ人が東インドで富を蓄積したのち彼女を捨てて帰国することは、民族主義者にとってインドネシアを搾取している典型的事例とされたのである。

4. ヨーロッパ人女性とインドネシア人男性の混淆婚とニヤイ論争

1930年代のヨーロッパ人と現地人との結婚比率も、全婚姻数の20%を超えることが多かった[1931年：27.07 (22.66)%、1932年：26.84 (22.94)%、1933年：24.68 (21.94)%、1935年：21.55 (17.68)%、1936年：24.54 (20.63)%、1937年：19.39 (16.24)%、1938年：20.70

(16.48)% ; ()内はインドネシア人（原住民）女性との婚姻率][*Indisch Verslag* (1932), (1934), (1937), (1939)]. また30年代には、ヨーロッパ人女性と現地人男性の婚姻数が増えた⁵。1929年の世界恐慌により東インドの私企業が不況に陥ると、ヨーロッパ人男性の来航者は減少し始め、東インド在住のヨーロッパ人女性と現地人男性との婚姻が増加し始めた。またオランダに留学する現地人男性が増え、そこでヨーロッパ人女性と結婚するケースも珍しくなくなった。

こうしたヨーロッパ人女性の現地人男性との結婚の増加は、ヨーロッパ人とインドネシア人双方の間で高い関心を呼んだ。インドネシア人のなかには、妻が夫を真に愛していれば問題ない[*Garoeda* (1931)]、あるいは時代の自然な現象[*Persamaan* (1935a)]とする論説もあったが、上述のように民族主義者の多くは、民族主義精神の後退を招くと非難した。またヨーロッパ人の間では、一夫多妻が認められかつ離婚率の高いムスリム現地人男性との結婚が、ヨーロッパ人女性の境遇を不安定にさせると懸念され始めた。

そこでオランダは1930年代に、一夫一妻制を謳う婚姻法の制定を検討するに至った。男女間の平等な権利を保障するために、従来ムスリム男性の婚姻や離婚を司ってきたムスリム役人プンフルを介さず、婚姻は役所の民事登録で、離婚は法廷で処理されるものにしようとした。また、これまでムスリム男性に優先的に付与されていた離婚権を、女性にも対等に保障しようとした。さらに東インドでしばしば見られた幼児婚を避けるために、男性は18歳以上、女性は15歳以上の結婚年齢制限を設けようとした[*Ontwerp-Regeling* (1937); *Locher-Scholten* (2000): 192-96]。

1937年に34条よりなる新たな婚姻法案が出来上がった。政庁の原住民顧問官は、まず現地人女性団体のリーダーたちから意見を徴しようとした。インドネシア夫人連合協会、タマン・シスワ、インドネシア夫人、目覚めた夫人、スンダ夫人会、スマトラ主婦連合の代表者たちが、同年の6月6日に原住民顧問官の自宅に招かれた[*Conferentie* (1937)]。一夫多妻制に反対し、離婚における男女平等な権利を唱えていた彼女たちの意見は、総じて法案に好意的であった。彼女たちは、その法案がインドネシア人女性の権利に配慮されることを評価した。高等教育を受けた有識者女性達の当初の反応であった。

しかし、イスラーム団体はこの法案に対し、厳しい態度で臨んだ。従来のオランダの政策は、ムスリム住民の宗教的領域について、反植民地主義的でない限り干渉しない原則を保持してきた[*小林* (2008): 119]。しかし、この婚姻法案は彼らの宗教生活の根幹に触れざるを得なかった。保守派のムスリムは、コーランの認める一夫多妻制は、一夫一妻制よりも非合法の同棲や売春行為を防ぐものであると反論した[*Locher-Scholten* (2000): 200-202]。また政庁が新婚姻法をとおして、イスラームの宗教生活に干渉することに強い反発が生じた。ジャワやスマトラの各地のイスラーム団体の集会で、新婚姻法への反対が表明された。新婚姻法の趣旨が、現地人男性と結婚するヨーロッパ人女性の権利の保障にあることに、とりわけ反発は強かった。彼らは、ヨーロッパ人男性がインドネシア人女性をニヤイとしていることを放置し、ヨーロッパ人女性の境遇のみを配慮していると批判した。

この婚姻法案をめぐる議論は、ニヤイ問題を再び前面に出させた。ニヤイ慣行は元来現地社会のものであり、不安定な身分ながら、同棲者と別れるときに彼女には手切れ金や子供の養育費が渡された。またニヤイとなった現地人女性とヨーロッパ人同棲者との関係は、現地人カップルの離婚率の高さに比し、同棲者が帰国するまで比較的關係が安定していた[*Aksi* (1931)]。しかし民族主義運動の高まりとともに、ニヤイは植民地支配の犠牲者とみなされ、1920年代終わりになると、女性の運動家たちの間でもニヤイ問題が正面からとり上げられた。1929年バタヴィアで開催されたインドネシア夫人連合協会は、ヨーロッパ人がニヤイを持つことの禁止を、東インド総督の諮問機関の国民参事会（フォルクスラート）で法律化する要求を決議した[*Bahagia* (1930)]。だが、フォルクスラートは採り上げなかった。

これに対しナショナリストは、反ニヤイ・キャンペーンを組んだ。1930年8月26日のイ

インドネシア夫人連合協会の機関誌*Isteri*と関係誌の*Bahagia*紙は、「オランダ人のニヤイになった者の運命」と題する記事を載せている[*Isteri* (1930); *Bahagia* (1930)]。それによると、一人のインドネシア人女性が、オランダ人の植民地軍の軍曹と結婚していた。しかし、その夫はオランダに休暇で帰国した。夫は定期的を送金すると約束したという。しかし、数か月たったが、夫からは梨の礫であった。長らく待ったその女性は、夫の上司より彼が帰国する船便をやっと聞き出すことができた。彼女はバタヴィアの外港タンジョンプリオクに、出迎えに行った。彼女が夫を見つけた時、彼はヨーロッパ人女性を連れていた。驚いた彼女は夫のもとに行ったが、彼は結婚した覚えがないと答えたという。彼女は泣きながら婚姻証書を警察官に見せた。しかし、状況は元に戻らなかった。*Isteri*紙は、彼女を実質的にニヤイとしたオランダ人を非難し、こうした行動が、インドネシア人女性を路頭に迷わせ、売春婦に貶める原因であるとしている。同様な事例は1935年の*Persamaan*紙で、一人のニヤイと同棲していたオランダ人が、ともに日本の大阪に行ったが、男性に新たな愛人ができ、彼女は捨てられたとことを報じた記事にも見られる[*Persamaan* (1935b)]。彼女らの保障されない不安定な境遇を嘆いたものである。

こうしたなかで反ニヤイは、婚姻法案に反対する現地人勢力を結集させる役割を担った。上述したようにイスラーム諸団体の間でも、婚姻法案が規定する一夫一妻制をめぐり、意見が分かれていた。また民族主義者たちは、概して一夫一妻制を支持していたし、民事登録にも抵抗はなかった。諸勢力が一致して反対できたのは、外来系住民がニヤイを持つことであった。婚姻法案を議論するに当たり、ムスリム有識者はしばしばこの問題を取り上げた[*Moehammad Hasan* (1937); *Pandji Islam* (1937); *Pedomas Masjarakat* (1939)]。1937年9月、これまで多様な諸団体が存在していたインドネシア人のムスリムの間で、新婚姻法案反対をきっかけに、インドネシア・イスラーム会議[MIAI(Madjlisul Islamil a'laa Indonesia)]が結成されるに至った[Benda (1958): 90]。ムスリム勢力の予想を超えた抵抗を受けたオランダは、1938年2月に新婚姻法案を撤回した。ムスリム達はさらに、ニヤイを持つことの禁止法令の制定をオランダ政庁に訴えた。しかし、その法令化はオランダ体制下で実現しなかった。

1910-1930年代の東インドは、オランダ人もインドネシア民族主義者もムスリムも、民族的差異を強く意識せざるを得なかった。ただし、そうした状況下でもヨーロッパ人と現地人との婚姻率は、必ずしも後退しなかった。また非婚姻により原住民女性から生まれ、父親に認知されヨーロッパ人となった子供の数は、正式結婚の場合とほぼ同数とみなされている[*Marle* (1951-52): 499-500]。混淆婚や子供認知の前提となる同棲慣行は、相変わらず存在した。こうした環境下でヨーロッパ人男性と現地人女性の婚姻は、インドネシア民族主義者にも妥当なものと考えられたのである。

5. まとめと展望

東西世界と古くから交流し、来訪した外来者と現地人女性が擬似結婚する慣習を有した東南アジア島嶼部では、外来系住民のコミュニティが各地で形成された。欧亜混血者もそうしたコミュニティを構成した集団の一つであった。19世紀終わりから人種主義が展開し、かつ新来のヨーロッパ本国人が増えるなかで、彼らは従来の職を新来者に追われ、社会的に周縁化した。また、民族主義運動の展開とともに、ニヤイは妾とみなされるようになり、原住民とヨーロッパ人や華人との差異が強調され出した。

しかしながら、そうした差異が強まるほど、仲介者の役割は重要となる。1910年代-30年代インドネシアの都市の社会生活において、現地生まれのヨーロッパ人や華人は、重要な役割を担い続けた。ヨーロッパ人と現地人女性との婚姻も、ヨーロッパ人の全婚姻数の約4分の1前後を記録した。そのための出会いの場や結婚を成立させる社会的環境が存在した。上述したように現地人女性との婚姻率は、すでに欧亜混血者のコミュニティが存在する地域で高かった。またヨーロッパ人兵士と結婚した現地人女性は、東インドに永住する

意思のある相手を多くが望んでいた[Baay (2008): 148-149]。1930年の国勢調査では、東インド在住のヨーロッパ人24万余の約7割が、東インド生まれであった[Volkstelling 1930 (1933): 21,32]。従来、民族主義運動が隆盛し社会変化のスピードが速くなった1920年前後を境に、東インド社会は大きく変容したとみなされてきた[Couperus (1924): 140-145; Nieuwenhuys (1959)]。しかし、男女関係の観点からみれば、1920年代・30年代の東インドにはハイブリッドな環境が依然として存続していた。

ただし、東インド社会に変化がなかったわけではない。反ニヤイの声は次第に広く共有されるに至り、1937年以降、ヨーロッパ人とインドネシア人女性との同棲数が減少しはじめたことが指摘されている[Marle (1951-52): 498]。こののちインドネシアは、1942年～45年の日本占領期を経て、1945～1949年に再植民地化を目論んだオランダと独立闘争を展開した。この過程で、インドネシア人とヨーロッパ人の亀裂は増大した。ニヤイや欧亜混血者が両者を仲介できる時代は、終わりを迎えた。1949年のオランダからインドネシアへの主権譲渡後、ヨーロッパ人の法的地位を持った東インド在住者のうち、約9割がオランダ国籍を選んだ。あとから見ると、まるで媒介変数であったかのように表舞台から後退しているが、現地人妻妾や欧亜混血者は、現在インドネシアの枠組みの基盤となる東インドの社会統合に、重要な役割を担ったように思われる。

注

- 1 19世紀後半・20世紀前半期の東インドにおける「原住民」、「外来東洋人（華人やアラブ人など）」、「ヨーロッパ人」の間の婚姻を指す(オランダ語で“gemengde huwelijk”、インドネシア語で“nikah campuran”と表記される)。
- 2 小説や新聞紙におけるニヤイの描かれ方の変遷については、弘末(2013)を参照されたい。
- 3 ただし、同盟員のムスリム男性が現地人女性をニヤイとすることは、特に問題とされなかった。原則の適応に、民族的差異が持ち込まれたのである[Abalahin (2003): 400]。
- 4 華人女性との結婚がこのうちの約8分の1であった。
- 5 1930年～40年のインドネシア人男性とヨーロッパ人女性の婚姻数は、以下のように報告されている。1930年：6、1931年：27、1932年：39、1933年：24、1934年：36、1935年：33、1936年：43、1937年：29、1938年：23、1939年：35、1940年：20[Indisch Veslag (1932): 41, (1934): 49, (1937): 52, (1939): 54, (1941): 62]。

参考文献

- Abalahin, A. J. (2003), “Prostitution Policy and the Project of Modernity: A Comparative Study of Colonial Indonesia and the Philippines, 1850-1940”, Ph.D. dissertation, Cornell University.
- Abeyasekere, S. (1983), “Women as Cultural Intermediaries in Nineteenth-century Batavia”, in *Women’s Work and Women’s Roles: Economics and Everyday Life in Indonesia, Malaysia and Singapore*, edited by Lenore Manderson, Canberra, pp.15-29.
- Adam, A. B. (1995), *The Vernacular Press and the Emergence of Modern Indonesian Consciousness (1855-1913)*, Ithaca (New York).
- Aksi (1931), “Nasib pemoeda Indonesier: Berbini Belanda”, July 14.
- Andaya, B. W. (1998), “From Temporary Wife to Prostitute: Sexuality and Economic Change in the Early Modern Southeast Asia”, *Journal of Women’s History*, 9 (4), pp.11-34.
- アンダーソン, ベネディクト (1997), 白石さや・白石隆訳『増補想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版。
- Baay, R. (2008), *De njai: Het concubinaat in Nederlands-Indië*, Amsterdam.
- Bahagia (1930), “Membasmi perkawinan tidak sah”, February 21.

- Benda, J. H. (1958), *The Crescent and the Rising Sun: Indonesian Islam under the Japanese Occupation 1942-1945*, The Hague and Bandung.
- Blumberger, J. Th. P. (1931), *De nationalistische beweging in Nederlandsch-Indië*, (2nd ed., 1987), Dordrecht.
- ブルンベルヘル, ペテロス (1939), 『オランダ領東インドにおける印欧人の運動』 (深見純生訳、『総合研究所紀要』第22巻, 1号, 1996年9月), pp.55-81.
- Bosma, U. and Raben, R. (2008), *Being "Dutch" in the Indies: A History of Creolisation and Empire, 1500-1920*, Athens.
- Cohen, M. I. (2006), *The Komedi Stamboel: Popular Theater in Colonial Indonesia, 1891-1903*, Leiden.
- Conferentie (1937), "Conferentie met vertegenwoordigsters van verschillende en groepen van vrouwen, over de "Ontwerp-Regeling van een ingeschreven huwelijk voor hen, wier huwelijksrecht niet bij algemeene verordening is vastgesteld", op Zondag 6 Juni 1937 ten huize van den Adviseur voor Inl. Zaken, Salembalaan no. 4", in Verbaal 22/12/1937/no.18, Nationaal Archief, The Hague.
- Couperus, L. (1924), *Eastward*, trs. by J. Menzies-Wilson and C. C. Crispin, London.
- Darmo Kondo (1919), "Nikah tjampoeran", January 4.
- Dukut Imam Widodo 2010. *Soerabaia in the Olden Days*, Surabaya.
- Ext. 6/5/1913/74, Gouverneur-Generaal van Nederlandsch-Indië aan Minister van Koloniën (Buitenzorg, 5 Feb. 1913), in Verbaal 8/4/1913/71, Nationaal Archief, The Hague.
- 弘末雅士 (2013), 「20世紀前半期のインドネシアにおける現地人妻妾をめぐるイメージと男女関係」弘末雅士編『越境者の世界史—奴隷・移住者・混血者』春風社, pp.277-300.
- Hirosue, M. (2009), "The Changing Intermediary Role of Indonesian Concubines between the Local and European Communities at the Turn of the Twentieth Century", in *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the 19th and 20th Centuries*, edited by Yoneo Ishii, The Toyo Bunko, Tokyo, pp.114-137.
- 深見純生 (1996), 「1913年のインドネシア—東インド党指導者国外追放の社会的背景」『東南アジア研究』34巻1号, pp.35-56.
- Garoeda (1931), "Apakah beristerikan poeteri asing ma'nanja ta'mentjintai akan bangsa Indonesia?", no.3-7, March-July.
- Indisch Verslag* (1932), (1934), (1937), (1939), (1941), Batavia.
- Isteri* (1930), "O, nasib njai-njai!", no. 5, September.
- Java-Bode* (1904), December 5.
- 小林寧子 (2008), 『インドネシア 展開するイスラーム』名古屋大学出版会.
- Locher-Scholten, E. (2000), *Women and the Colonial State: Essays on Gender and Modernity in the Netherlands Indies 1900-1942*, Amsterdam.
- Marle, A. van (1951-52), "De groep der Europeanen in Nederlands-Indië, iets over ontstaan en groei" *Indonesië* 5, pp.95-121, 314-341, 481-507.
- 松尾大 (1997), 『バタヴィアの都市空間と文学—近代インドネシア文学の起源—』大阪外国語大学学術出版委員会.
- McVey, R. T. (1965), *The Rise of Indonesian Communism*, Ithaca, New York.
- Ming, H. (1983), "Barracks-Concubinage in the Indies, 1887-1920", *Indonesia*, no. 35, pp.65-93.
- Moehammad Hasan, T. (1937), *Ontwerp-Ordonnantie op de ingeschreven huwelijken*, Buitenzorg.
- 永積昭 (1980), 『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会.
- Nederburgh, J. A. (1899), *Wetgeving voor Nederlandsch-Indië*, Batavia.
- Nieuwenhuys, R. (1959), *Tussen twee vaderlanden*, Amsterdam.

- Nieuwenhuys, R. (1982), *Komen en blijven Tempo doeloe: Een verzonken wereld Fotografische documenten uit het oude Indië 1870-1920*, Amsterdam.
- Nieuwenhuys, R. (2005), *Sinjo Robbie*, Leiden and Amersfoort.
- Oetoesan Hindia* (1919), “Pertjampoeran Darah”, January 8.
- Oetoesan Hindia* (1922), “Poeteri Djawa kawin Belanda Toean”, December 12.
- Oetoesan Sumatra* (1931), “Kawin tjampoeran”, January 22.
- Onderzoek* (1914), *Onderzoek naar de mindere welvaart der inlandsche bevolking op Java en Madoera. IXb³, Verheffing van de inlandsche vrouw*, Batavia.
- Ontwerp-Regeling (1937), “Ontwerp-Regeling van een monogaam huwelijk voor hen, wier huwelijksrecht niet bij algemeene verordening is vastgesteld”, Verbaal 22/12/1937/no.18, Nationaal Archief, The Hague.
- Overzicht* (1931), *Overzicht van de inlandsche en Maleisch-Chineesche pers 1931*, vol. 4.
- Pandji Islam* (1937), “Ordonansi perkawinan bertjatet”, (by Rasoena Said), no.23, August 15.
- Pedoman Masjarakat* (1939), *Pedoman Masjarakat* 1 Feb. 1939, no.5 in Verbaal 24/11/1939/E⁵⁰, Nationaal Archief, The Hague.
- Penerangan Islam* (1928), “Poeteri Indonesia, Awas!”, no.6
- Perempoean Bergerak* (1919), “Kawin dengan lain bangsa”, December 16.
- Persamaan* (1935a), “Kawin tjampoeran”, April 4.
- Persamaan* (1935b), “Maitresse alias Njai!”, June 11.
- Prostitutie (1919), “Prostitutie” in *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*, vol. 3, The Hague and Leiden, pp.511-515.
- Reid, A. (1988), *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, vol.1, New Haven and London.
- Sinar Hindia* (1919), “Adres. Toean SKR. Djowo Loegoe”, January 27.
- Soeara Indonesia* (1931a), “Soal perkawinan tjampoeran”, January 5.
- Soeara Indonesia* (1931b), “Perkawinan Barat dan Timoer”, January 29.
- ストーリー, アン・ローラ (2010), 『肉体の知識と帝国の権力—人種と植民地支配における親密なもの』 (永渕康之・水谷智・吉田信訳), 以文社.
- Taylor, J. G. 1983. *The Social World of Batavia: European and Eurasian in Dutch Asia*, Madison, Wisconsin.
- Tsuchiya K. (1991), “Popular Literature and Colonial Society in Late-Nineteenth Century Java: *Cerita Nyai Dashima*, the Macabre Story of an Englishman’s Concubine”, 『東南アジア研究』 28巻 4号, pp.467-480.
- Verbaal 9/8/1913/B13, Assistant resident aan resident van Batavia, (Meester-Cornelis, 10 Mei 1913), Nationaal Archief, The Hague.
- Volkstelling 1930* (1933), *Volkstelling 1930, Vol. 6: Europeanen in Nederlandsch-Indië*, Batavia.
- Watson, C. W. (1971), “Some Preliminary Remarks on the Antecedents of Modern Indonesian Literature”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, vol. 127, pp.417-433.
- 吉田信 (2002), 「オランダ植民地統治と法の支配—統治法109条による「ヨーロッパ人」と「原住民」の創出」 『東南アジア研究』 40巻2号, pp.115-140.